HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本書紀古訓の形容詞語彙に関する研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	劉, 琳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12077号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61604
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Liu_Lin_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（文学）　氏名　劉　琳

学位論文題名

日本書紀古訓の形容詞語彙に関する研究

本論文は、伝存する『日本書紀』古写本・版本の本文に施された訓点（書紀古訓）を調査資料として、これまでの研究においてあまり触れることがなかった書紀古訓の形容詞語彙を取り上げ、量的構造・意味的構造・諸本におけるその異同・原文の漢字・漢語との対応関係など、いくつかの方面から調査・分析を行ったものである。

第 1 章では、『日本書紀』諸本を紹介し、本研究で取り上げる『日本書紀』及び書紀古訓に関するこれまでの先行研究をまとめ、本研究の背景と研究目的について述べた。

書紀古訓は、古写本系統から、岩崎本（巻二十二・二十四、平安中期書写、Ⓐ平安中期点・Ⓑ院政期点・Ⓒ室町期点）、前田本（巻十一・十四・十七・二十四、平安後期書写、院政期点）、図書寮本（巻十・十一～十七・二十一～二十四、院政期書写、院政期点）を取り上げ、卜部家系統から、卜部兼方本（弘安本、巻一・二、弘安九年[1286]以前の書写）、卜部兼夏本（乾元本、巻一・二、乾元二年[1303]書写）、卜部兼右本（兼右本、巻三～三十、天文九年[1540]成）を取り上げ、近世版本から、寛文九年版本を取り上げることとした。

第 2 章では、計量的方法を用い、①語数、②活用の構成比率、③語の階層構造、④語の新旧の観点から書紀古訓の形容詞語彙について調査を行った。調査は、村田菜穂子氏の方法を参考にし、そこで利用した資料の年代を考慮して年代的に隔たりの少ない古写本系統の日本書紀訓点資料三種（岩崎本、前田本、図書寮本）を利用することとし、その結果を村田氏の調査と比較して書紀古訓の形容詞語彙の様相を明らかにした。①語数（異なり）は、三種の訓点本にはいずれも形容詞の附訓が多いとは言えない。利用した日本書紀の訓点資料はいずれも三十巻の完本ではないため、形容詞の語数が少ないと考えられる。②活用形の構成比率は、書紀古訓形容詞語彙の体系的特徴として、岩崎本の平安中期に加点したものはク活用形容詞の比率が最も高い。それを除いて、岩崎本の院政期と室町期の二種の訓点及び院政期加点の前田本・図書寮本において、ク活用形容詞がいずれも六割以上を占めて、シク活用形容詞は三割程度に止まる。これを村田氏の調査結果と比較すると、岩崎本の平安中期点は中古の訓点資料の形容詞にかなり類似していることが分かる。岩崎本の院政期点と室町期点、前田本と図書寮本の院政期点における古訓形容詞は中古散文の形容詞に近似している。③語の階層構造は、成立した語形が形容詞として一番目であるか（第一次形容詞、例「くるし」）、既存形容詞に何らかの語構成要素が接合・構成された二番目であるか（第二次形容詞、例「こころ+くるし」）から見るものである。三種の古写本における古訓形容詞はいずれも第一次形容詞の語数が

多く、七割以上を占めている。ここから、日本書紀三種の古写本における古訓形容詞は上代形容詞の性質に近似していることが分かる。④語の新旧は、調査の結果、三種の古写本における中古に造語された「新出の語」より上代からすでに存在する「既存の語」のほうが多用されている。

第 3 章では、田島毓堂氏が提唱・推進する「意味分野別構造分析」という方法を用いて、神代巻の古訓形容詞語彙について、調査を行った。『日本書紀』三十巻のうち、巻三～三十は歴代天皇の歴史を記述する内容で、巻一・二は上代の神話を記述する内容である。他の巻と異なる内容を扱った神代巻は、その形容詞語彙が意味的にはどのような特徴があるかを究明した。調査した結果は、神代巻における古訓形容詞の語数は多いとは言えず、意味分野は 30 以上にわたり、分類語彙表にある意味コードで言うと、31332(良不良・適不適)、31345(美醜)、 31911(長短・高低・深浅・厚薄・遠近)の項目では語彙の使用が他の意味分野より豊富であるというものである。

第 4 章では、巻二十二と巻二十四を有する『日本書紀』の訓点本四点を調査資料として、同文比較の方法によって調査した。同文比較とは、同文の漢文をどのように訓読しているか、特に加点の年代性、学派による相違を見るための方法である。調査結果は次の 3 点にまとめられる。①四種の訓点本において古訓形容詞の附訓状況、仮名の表記、符号の使用などには相当な相違が見られる。岩崎本において、室町時代点の古訓はそれ以前の古訓に比べ、読み方が変遷したものは少なくない。四種の訓点本を比較すると、寛文九年版本と兼右本の附訓は一致する点が多く、いずれもそれ以前の写本の読み方と加点当時の読み方の入り交じったものが見られる。②使用語彙の語数は図書寮本、寛文九年版本、岩崎本、兼右本の順で増えている。四種の古訓資料はいずれも上代形容詞の使用が多い。しかし、岩崎本のⓒ室町期点、兼右本、寛文九年版本では新しい読み方も見られる。したがって日本書紀の古訓形容詞には上代形容詞の残存は見られるが、それ以降の時代の新要素も含んでいる。このような特殊性を有する文献の形容詞語彙を、一時代の代表的なものと見なすことはできない。③漢字二字或いは稀ではあるが二字以上の漢字連合の読み方について考察した。このような漢字連合は和語一語で読むか、和語二語（一語ずつ）で読むか、それと対応する漢語の語構成と緊密な関係があるではないかと推測する。そして、音読みの用例は一例も見えず、これは先行研究では指摘されたように、日本書紀加点者がなるべく古い時代の大和言葉で訓もうとしたことによるものである。

第 5 章では、原文の形容詞、古訓の形容詞をめぐって考察を行った。まず、原文の形容詞について、その附訓状況を統計し、原文と古訓の品詞は七割程度が一致することを明らかにした。そして、原文と和訓の品詞が一致しない理由について原文の漢語の語義・語法の視点から分析した。次に、古訓について、①品詞、②語法構造、③意味から見た漢字・漢語との対応などの方面から考察した。①品詞について、集めた用例の半分以上は、古訓と原文の漢字・漢語の品詞とは一致する。一致しない附訓は形容詞以外の品詞で訓読するが、『日本書紀』の原文を的確に理解しようとする訓読意識との関係から説明を行った。②語法構造とは、漢字二字連語の文法構造を指すが、これについて合符のある漢字二字を中心に調査した。合符の位置に関係なく、古訓の語構成は漢字連合の語法構造とほぼ一致する。ここから、漢字・漢語の字義・語義だけでなく、その語法構造も

考慮し、可能な限りそれと一致するという日本書紀の附訓態度が窺える。③意味から見た漢字・漢語との対応について、和語一語で訓読する漢語熟語はその構成する各漢字の字面の意味ではなく、漢語全体の語義を解釈できる形容詞によって附訓することを示した。これは、これらの漢語の構成する各漢字の字義と対応する和訓を用いて一字ずつ訓読するより、更に漢語の語義を正確に解釈できることにその附訓方法を用いる理由があると考えられる。

第 6 章では、漢字「賢」にかかわる古訓形容詞「カシコシ、サカシ、ヲサナシ」の三語を取り上げ、原文においてこの三語の古訓を持つ漢文の用例を収集し、原文の文脈に基づき分析したうえで、三語それぞれの意味用法を記述した。意味が変遷した「カシコシ、サカシ」の二語について、平安時代以降、この二語の意味用法は拡大し、上代や現代よりはるかに意味用法が広いことを示した。

以上のような考察を通して、各写本における古訓形容詞語彙の様相を明らかにした。しかし、利用した古写本のうち、三十巻の完本であるものは少なく、三十巻の完本である寛文九年版本から採集した語彙も巻二十二・二十四だけである点から考えると、日本書紀古訓の形容詞語彙の全体像を究明するために、三十巻の完本を利用し、更に徹底的な調査が必要となるが、それは今後の課題とした。